

「オークパークの自邸」型住宅の変容について
—F. L. ライトの住宅作品における多様性生成システムの研究—

水上 優
人間環境部門

Modifications of “Own House in Oak Park” Type Houses
A Study on the Diversity Generation System of
Frank Lloyd Wright’s Houses

Yutaka MIZUKAMI

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: This paper makes an analysis of the modifications of the houses of Frank Lloyd Wright’s “Own House in Oak Park” Type prescribed by this study. This type is defined by a non-diagonal connection of living room and dining room. It was seen in his work from the early period even as “Charnley” Type, and applied to the house on relatively tiny site. The spatial intention to extend from inside outward transformed this type into “Willits” Type and “Robie” Type that belong to the Connection #1. Also it was suggested that this type developed to “Davidson” Type that belongs to the Connection #2. However, this type intended to more compact square-plan after 1907, and it developed to the Connection #3. In conclusion, it was suggested that this type portends not only another type of Prairie Houses of the same period but also later Usonian Houses.

Keywords : Frank Lloyd Wright, prairie house, diversity, living room, dining room, system

1. はじめに

本稿は、建築家フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright, 1867-1959) の思索と制作の関わり合いを、それらの変容の事態に着目しつつ明らかにする研究の一部をなすものである¹⁾。作品の変容の事態は、独自のダイアグラムを用いて分析される。すなわち、住宅をその構成要素 (部屋) に解体し、平面、断面に即して配置するダイアグラム A²⁾、及び構成要素から形態、寸法などのデザインの要素を取り除き、要素間のかかわり合いを示すダイアグラム B³⁾ である⁴⁾。先稿⁵⁾において、初期住宅作品の居室 (居間及び食堂) を構成する要素の繋がりに次のような同一性が指摘されている。すなわち繋がり①:「EH (入口) - Lib (書斎) あるいは Re (応接室) -L (居間) -D (食堂) -Pa (配膳室) -K (台所) -

SH (階段室) -E (入口)」⁶⁾、繋がり②:「L-EH-D」及び繋がり③:「EH-LD (食堂を含む居間)」。これに構成要素としての居室 (L, D) の「平面的連続形式」すなわち④互いの矩形平面の辺で接するもの、⑤ L, D, Lib (あるいは Re) の3室が一直線状に連続するもの、⑥平面のコーナー (隅角) 部分で対角線方向に連続するもの、以上を反映させることにより、かれの住宅作品の特徴として、いくつかの「型」が仮設される (表 1)。これらの型の概念の導入によって、同一型に属する個別住宅作品間の差異と同一性が、型の展開として記述・分析される。また異なる型に中間的に属する作品への注目によって、型同士のかかわり合いが考察される。その全体像を或るシステムとして浮かび上がらせることが、本研究の目的である。

〔表 1〕 プレイリー・ハウスの型 (室名の略記は注記 6 参照)

| 主階平面 / 断面図 | 繋がり ① | | | | 繋がり ② | | | |
|------------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|------|----------|
| | 自邸型 | ヒコクス型 | ウィリツ型 | チャーリー型 | パートン型 | ハーディ型 | ロビー型 | デイビッドソン型 |
| ダイアグラム A | | | | | | | | |
| ダイアグラム B | | | | | | | | |

本稿では、1916年までに実現した作品および計画案における「オークパークの自邸」型(以下「自邸」型)にあたる62作品をとりあげ考察する。1900年以前の住宅の型は、オークパークの自邸(1889)から始まるこの「自邸」型と、「チャーリー」型⁷⁾しか見られない。後に出現する各型との連関が問われるであろう。

2. 「自邸」型平面の住宅の構成

「自邸」型は「E-L-D-K-SH-E」のループが成立する繋がり①において、LとDが隣り合って接する空間構成を持つものであり、ダイアグラムBに[]の記号を用いて、[L-D]と示される(表1参照)。以下、主階の平面構成について年代順⁸⁾に記述・分析する。

①ライト自邸(1889): ライト最初期の作品。平面中央にLに開くイングルヌック(炉辺)があり、その周りにL-D-Pa-K-SH-E-Lのループ。[L-D]関係成立。[L-D]境界に「上部に梁」の平面図表記。Dの平面、L、Eの8角形ベイウインドウ、Veの円形テラス、裏Poの矩形平面等が外部へ向けて風車状に突出。これは[D-Pa-K]や[K-SH-E]の一直線に揃った壁面と対比的。

②ブラッサム邸(1892): Lに開くイングルヌック周りに、ダイアグラムBに明らかのようにL-D-Pa-K-SH-Lのルー

プが配され、基本平面構成は①に準ずる。L手前に[Lib-EH-Re]が付属。EHに繋がる3室、Lib、L、Reとの境界に奥行き深いアーチ。[Lib-L-D]の境界は奥行き浅いアーチ。L外側に矩形平面のTeが付く、Dからは椅子付き半円形ベイウインドウのあるConが迫り出す。EHの前に半円形Po、Kに矩形Poが付く。主階段と使用人階段が途中合流。

③C. ロバーツ邸案(1892): 基本平面構成は①に準ずるが、半円形平面の迫り出しのあるDは正方形平面のParより面積が広い。ParとRe、ParとDの境界に「ドアなし」の平面図表記。Par外部にTe。入り口LoはS字屈曲し、外部から5回の折れ曲がりを経てDに至る構成。

④W. ゲイル邸(1893): L-D-Pa-K-Pas-ESH-Lのループはあるが、暖炉を中心としない。L暖炉はD暖炉と別に住宅外壁側にある。[ESH-L]、[L-D]、[ESH-Re]の境界に「縁付き開口」の平面図表記。主階段と使用人階段が途中合流。

⑤ウィンズロー邸(1893): Re(EH)に開くイングルヌックと背面でDに開く暖炉を平面の中心としてRe-L-D-Pa-K-RE-Reのループ。イングルヌックは7連半円形アーチのある列柱によってReから仕切られる。[Lib-Re-L]の境界は片開引込戸。[L-D]境界はLより階段3段上がるAlcで、LとDに面したPoに繋がる。Lには腰壁のある椅子付き8角形ベイウインドウ、Dには椅子付き半円形ベイウインドウ

〔表 2〕 「自邸」型住宅の平面図とダイアグラム (1)

| | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 |
|---------------|----------|----------|-----|----------------|----------|-----|
| ① ライト自邸 1889 | | | | | | |
| ② ブラッサム邸 1892 | | | | ④ W. ゲイル邸 1893 | | |

のある Con が迫り出す。

⑥ P. ゴーン邸 (1894) : 基本平面構成は①に準ずる。正面 Te から V を経て EH。[EH-L] 境界は両開引込戸。[L-D] 境界に「縁付き開口」の平面図表記。L と D に緩やかな多角形ベイウィンドウが付く。主階段と使用人階段が途中合流。

⑦ F. バグリー邸 (1894) : 基本平面構成は①の鏡像。[SH-L], [L-D] 共に境界は片開引込戸。D の 8 角形ベイウィンドウが住宅の矩形平面から迫り出す。イオニア式柱頭を持つ列柱のある Ve が、正面では入り口用に、背面ではサービス用に配される。主階段と使用人階段が途中合流。

⑧ O. ゴーン邸案⁹⁾ (1894) : 外観は⑤に酷似。EH-L-D-Pa-K-RE-EH のループはあるが、中心に暖炉はなく、L 暖炉は外部 Po 側に、D 暖炉は K 側にある。D から 8 角形ベイウィンドウが迫り出す。[L-D] の境界 Alc もなし。2 階不明。

⑨ マカフィー邸第 1 案 (1894) : 敷地は湖畔。Te-V-EH-L-D-Dem と、奥行きある空間構成。[L-D] 境界は袖壁のある両開引込戸。D 外部 Te は湖に望む。L 暖炉は Te へ開く窓に対面してサービスゾーン側にある。V から L と反対側に 8 角形平面の Bil。正方形平面の Lib, 5 角形平面の Re を経て EH に至る。これらの部屋の背後に上階への階段を含むサービスゾーン。サービス専用階段あり。2 階不明。

⑩ マカフィー邸第 2 案 (1894) : EH 内に半階上がる階段出現。サービスゾーンが縮小し L の両側に窓が配され外部

に Te。暖炉は L 奥に移動し、暖炉脇に D への入り口が配される。D は Dem が消滅して Pa 側に暖炉が出現し、D 平面の軸は L 平面の軸から直角方向に変更される。地上階のサービスゾーンは Pa とサービス専用階段に縮小され、K は下階。8 角形平面は Lib, 5 角形平面と正方形平面は Nu に変更され、Lib と Nu の移動はできなくなる。2 階不明。

⑪ J. ボールドウィン邸案 (1895) : 平面中央の暖炉周りに Lib (L), D, Stu の 3 室が配され主室ゾーンを形成。暖炉は 3 室に開く。L に 8 角形ベイウィンドウ。主室ゾーンの手前に EH 及び八角形平面の Par からなる入り口ゾーン、奥にサービスゾーン。使用人専用階段あり。

⑫ グッドリッチ邸 (1896) : 基本平面構成は①の鏡像であるが、Sit (L) の一部が衝立で仕切られ Lib となる¹⁰⁾。厳密には [Sit-Lib-D]。外形は矩形となり Sit に緩やかな多角形ベイウィンドウが付く。主階段と使用人階段が途中合流。

⑬ ロバーツ邸案 No.1 (1896) : 基本平面構成は②に準ずるが、イングルヌック片方の壁が D への扉となり、Sit (L) から Lib を経ずに [Sit-D] が成立。[Sit-D] は対角線方向の配置となる。[Lib-D] は袖壁のある開口。

⑭ ロバーツ邸案 No.4 (1896) : 基本平面構成は①の鏡像であるが、中央暖炉は Sit (L) と D の両室に開く。外形は矩形となり Sit に 8 角形ベイウィンドウが付く。

⑮ G. ファーベック邸 (1897) : Po-E-L-D が軸状に連続

表 3 「自邸」型住宅の平面図とダイアグラム (2)

| | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 | | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 |
|-----------------|----------|----------|-----|---------------------|----------|----------|-----|
| ⑤ ウィンズロー邸 1893 | | | | ⑨ マカフィー邸第 1 案 1894 | | | |
| ⑥ P. ゴーン邸 1894 | | | | ⑩ マカフィー邸第 2 案 1894 | | | |
| ⑦ F. バグリー邸 1894 | | | | ⑪ J. ボールドウィン邸案 1895 | | | |
| ⑧ O. ゴーン邸案 1894 | | | | ⑫ グッドリッチ邸 1896 | | | |

し突き当たりに暖炉。八角形平面の L にはその軸に直交向きの暖炉。D に Alc が付く。裏動線が取られ使用人専用階段あり。

⑬ R. ファーベック邸 (1898) : 基本平面構成は①に準ずるが, SH に Alc が付き主階段と使用人階段が途中合流する。

⑭ G. スミス邸 (1898) : 平面中央に D から V に至る H が設けられ, Sit (L) の暖炉は外壁面に付く。

⑮ J. アダムズ邸 (1900) : 基本平面構成は①に準ずる。D, Re の八角形ベイ, K, Po の階段が矩形平面から突出し, 平面中央部の SH に暖炉ルーム。L の暖炉は V 側に付く。

⑯ フォスター邸 (1900) : 基本平面構成は①の鏡像。大きな L 1 つの構想が後に仕切られて同面積の L と D となった。両者の暖炉を離して設けるスタディあり。

⑰ ブラッドリー邸 (1900) : L に開く暖炉と階段を中心に, 南北方向の廊下を介して東側に L, D, Re, 西側に E とサービス諸施設が配される十字形平面。使用人専用階段あり。

⑱ カリフォルニアの住宅案 (1900) : 正方形 2 つが対角線方向に重なったような平面形において, 重なる部分を EH と

して一方を L, D が占め, 他方を K, B が占める構成。L と D の正方形平面の中央に両室に開く暖炉。

⑳ フリック邸 (1901) : SH を中心に L, D, Re, サービス諸室が放射状に配される。L-D 間に, SH と屋外パビリオンを繋ぐ H が介在して [L-H-D]。L と D の南側壁面は揃えられる。主階段と使用人階段が途中合流。

㉑ ハートリー邸 (1902) : 主階は 2 階。SH を中心に L, D, サービス諸室, 寝室群が配される。[L-D] は平面的には連続するが船底天井の方向は直交する。

㉒ スペンサー夏の家 (1902) : E-L-DA-SH-K がループを形成しない。[L-DA] 境界では梁のピッチが変化。

㉓ ランプ邸第 1 案 (1903) : 平面中央の階段周囲に E, L, D, H が配される。暖炉なし。[L-D] 境界のみ袖壁のある開口で, 他は扉で仕切られる。

㉔ ランプ邸 (1903) : 基本平面構成は①に準ずるが, E はなく, 外部 Te から L に直接入る。[L-D] 境界は袖壁なく, 垂壁下にカーテン用ブラケットがデザインされる。

[表 4] 「自邸」型住宅の平面図とダイアグラム (3)

| | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 | | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 |
|--------------------|----------|----------|-----|--------------------|----------|----------|-----|
| ⑬ ロバート邸案 No.1 1896 | | | | ⑮ J. アダムズ邸 1900 | | | |
| ⑭ ロバート邸案 No.4 1896 | | | | ⑯ フォスター邸 1900 | | | |
| ⑮ G. ファーベック邸 1897 | | | | ⑰ ブラッドリー邸 1900 | | | |
| ⑯ R. ファーベック邸 1897 | | | | ⑱ カリフォルニアの住宅案 1900 | | | |
| ⑰ G. スミス邸 1898 | | | | ㉑ フリック邸 1901 | | | |

⑳ ロバーツ4棟集合住宅計画(1903): 平面中央でLに開く暖炉周りにL-D-RE-ESH-Lのループ。全体は十字形平面であるが[L-D]。[L-D]境界は外部Veに繋がる。ESHはLだけでなくDにも繋がり、Reが付属。

㉑ ブラウン邸(1905): 暖炉を中心に北側半分をEと大空間のLが占め、南側をDとK、Hが2分する。

㉒ M. アダムズ邸第1案(1905): 基本平面構成は①に準ずる。正方形平面の半分をL、残りをSH、Dが2分し、これにPa、Kが接合した長方形平面からE、Reが突出。

㉓ トメク邸(1905): 主階は2階。下階からの階段とLに開く暖炉が平面中央にありL-Pas-D-H-Lのループ。[L-Pas-D]は片側が一連の窓列。L暖炉に対面して矩形のウィンドウシートが配され、両側から外部Teへ接続。Dは階段背後にキャビネット、対面にCon。HにDen、Kが繋がる。

㉔ マーティン邸庭師の住宅(1905): 基本平面構成は①の鏡像。Lへは外部PoよりVを経て入る。

㉕ サットン邸第2案(1905): 全体は十字形平面。Lに開

く暖炉を中心に、左周りにL-D-Pa-K-SH-Lのループ。[L-D]境界は袖壁の一部が格子。L、Dとも端部に外部Te。EHはL、Re及び母用Bに繋がる。

㉖ ダロー婦人邸案(1905): Lに開く暖炉と階段を中心にL-DA-K-ESH-Lのループ。[L-DA]境界は自在扉、[DA-K]境界は扉なし。Lの暖炉対面にPo。

㉗ ビーチー邸(1906): E、L、D、サービス諸室が十字形平面を構成。[L-D]間に、Hと屋外Loを繋ぐAlcが介在。

㉘ ホイト邸(1906): 基本平面構成は①に準ずるが、入り口はLに設けられ、トレリスをくぐって入る。暖炉を中心とするL、D、Pa、SHの長方形平面の1辺にK、H、Ofが付いて住宅平面全体が矩形となる。

㉙ ニコルズ邸(1906): 基本平面構成は①に準ずる。長方形平面からKの一部とEが突出。平面中央の暖炉がLに開く。

㉚ グリッドレー邸(1906): 全体は十字形平面。Lに開く暖炉を中心にL-D-ESH-Lのループ。[L-D]境界は垂壁、[D-ESH-Den]境界は引込扉。D背後にサービスゾーン。

[表5] 「自邸」型住宅の平面図とダイアグラム(4)

| | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 | | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 |
|---------------------|----------|----------|-----|--------------------|----------|----------|-----|
| ㉑ ハーロー邸 1902 | | | | ㉒ ブラウン邸 1905 | | | |
| ㉓ スペンサー夏の家 1902 | | | | ㉔ M. アダムズ邸第1案 1905 | | | |
| ㉕ ランプ邸第1案 1903 | | | | ㉖ トメク邸 1905 | | | |
| ㉗ ランプ邸 1903 | | | | ㉘ マーティン邸庭師の家 1905 | | | |
| ㉙ ロバーツ4棟集合住宅計画 1903 | | | | ㉚ サットン邸第2案 1905 | | | |

③③サイデンベッチャー邸案(1906):③③の構成に酷似するが、K と ESH の間に Po が介在。

③④フェビアン・ヴィラ (1907):住宅屋内の改装。十字形平面であるが暖炉は中心にはない。SH-L-D-SH のループ。L の暖炉は住宅外壁にある。

④④ 5000 ドルの耐火住宅案 (1907):基本平面構成は①に準じつつ、正方形平面にまとめる案。中央に暖炉を配し、その 1/2 を L, 1/4 を D 及び K とし、E と RE を正方形平面から突出させる構成。

④④ハント邸 (1907):④④の実現案。使用人動線区分のため H と L, D が扉で仕切れられ、階段は暖炉脇に移動し L と繋がる。D 拡張に伴い K が正方形平面から突出。L, D に接して Po。

④② A. ポーター邸第 2 案 (1907):長方形平面の長辺に階段室と K が貫入する平面形状。階段室周囲に L-D-K-RE-E-L のループ。[L-D] 片側は一連の窓列で、天井モールドディングも連続。L 暖炉は窓列に向く。L, D の外部に Te。

④③ A. ポーター邸 (1907):基本平面構成は④④に酷似。暖炉

は平面中心より偏心して L を広く取る。[L-D] 境界は暖炉側面からの飛長押で区分され外部 Te に開く。

④④ボーイントン邸 (1908):L に開く暖炉を中心に L-D-ESH-L のループ。L が暖炉に對面する Ve へ向け水平方向に展開するのに対し、D は段階的に天井高が高くなり垂直方向の変化がある。ESH には Den とサービスゾーンが繋がる。

④⑤ベイカー邸第 1 案 (1908):矩形平面を暖炉によって L と D に二分する。この主室ゾーンの両側に、E 及びサービスゾーンと SPo が配されて全体が十字形平面となる。暖炉両側の [L-D] 境界には飛長押が渡される。

④⑥ストックマン邸 (1908):基本平面構成は④④の鏡像。使用人動線は扉によって E とも区分。L と D に接して Ve。

④⑦ギルモア邸 (1908):半地下入口階から階段を上って 1 階に達する。連続する L と D が 1 軸を構成し、L 前面の Po、背後の暖炉、階段室、Lib がそれに直交する軸を構成する十字形平面。L と D は炉辺の造付椅子によって区分。D 背後に K。

④⑧ T. ゲイル夫人邸 (1909):④④を基本平面構成とする長方

[表 6] 「自邸」型住宅の平面図とダイアグラム (5)

| | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 | | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 |
|----------------|----------|----------|-----|-----------------------|----------|----------|-----|
| ③③ダロー夫人邸案 1905 | | | | ③③サイデンベッチャー邸案 1906 | | | |
| ③④ピーチー邸 1906 | | | | ③④フェビアン・ヴィラ 1907 | | | |
| ③⑤ホワイト邸 1906 | | | | ④④ 5000 ドルの耐火住宅 1907 | | | |
| ③⑥ニコルズ邸 1906 | | | | ④④ハント邸 1907 | | | |
| ③⑦グリッドレー邸 1906 | | | | ④② A. ポーター邸第 2 案 1907 | | | |

形平面。E, L, D, Kの矩形平面からReが突出。LとDの西側壁面は揃えられ段差により区分。暖炉はLのみに開く。

④⑨ラーウィル夫人邸案(1909): 平面の全体構成は②に酷似し、その鏡像となっている。Reはなく、KとPoの配置が入れ替わることによってKがESHに繋がる。

⑤⑩メルソン邸案(1909): [Ve-L-D]がT字型平面を形成し、Lの暖炉背後にE及びサービスゾーンが配された十字形平面。[Ve-L-D]の境界はいずれも間柱横の袖壁に格子。Lは一部天井高が高くなり暖炉の上にバルコニーの図面表記。L先端は三方に窓。D及びVeは一部船底天井の表記あり。

⑪⑫ビタールトタウン&イン計画案(1909): ④⑩を基本平面構成とする長方形平面。E-L-D-Kが繋がるがループ形成せず。階段はLのE側。EにPo。

⑬⑭ウォラー・アパートA案(1909): 平面構成は⑤⑩の鏡像。PoはLにつく。⑤⑩と同じ平面構成のB案もあり。

⑮⑯コモ・オーチャード・サマーコロニー計画案(1909): 構造体主要部分を共通させつつ利用客ニーズに応じて部屋の

割当を変更する提案のうちの1つ。暖炉のあるLを中心に一方にD, 他方に2B, 暖炉背後にB及びサービスを配置。

⑰⑱ジューグラー邸(1910): 基本平面構成は④⑩に準ずる。KがPaを介してDに繋がれることによって、暖炉裏HはLとDだけに繋がり、階段はHに付く。EとKはUによって繋がる。LとDにPo。

⑲⑳「郊外住宅」案(1911): DがDAとしてLと一体化。[L-D]境界にウィンドウシート突出。L暖炉は平面中央から外れHに背を向ける。Kは直接Dに接合。EとPoに接合し階段が付くHは、動線の結節点となる。上階不明。

㉑㉒グリーン邸(1912): Lの暖炉は平面中央から外れ、Eに背を向ける。暖炉を背にLからアルコーブが突出しVeへ開く。暖炉裏H脇にDen。

㉓㉔フロリダ・コテージ案(1912): ㉑㉒を基本平面構成としてつつ寝室を別棟とした平屋建て。[L-DA]境界は天井未達の間仕切りとなり、両室をまたいでテーブルが造りつけられ、Poへ開く。DAからPasを経て寝室棟へ至る。

[表7]「自邸」型住宅の平面図とダイアグラム(6)

| | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 | | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 |
|------------------|----------|----------|-----|---------------------|----------|----------|-----|
| ④③ A.ポーター邸 1907 | | | | ④④ T.グイル夫人邸 1909 | | | |
| ④④ ポーインントン邸 1907 | | | | ④⑤ ラーウィル夫人邸案 1909 | | | |
| ④⑤ ベイカー邸第1案 1907 | | | | ④⑥ メルソン邸案 1909 | | | |
| ④⑥ ストックマン邸 1908 | | | | ④⑦ ビタールト・イン 1909 | | | |
| ④⑦ ギルモア邸 1908 | | | | ④⑧ ウォラー・アパートA案 1909 | | | |

⑤⑧キア邸 (1915) : ④⑩を基本平面構成とする長方形平面。[L-D]境界に両開き扉。主階段と使用人階段が途中合流。キッサム邸 (1915) は E 周辺が若干異なる以外キア邸とほぼ同じ。

⑤⑨ペリー邸 (1915) : ⑤⑧とほぼ同じ平面構成であるが、主動線と使用人動線は屋内で交わらない。L の一方はアルコーブ状に突出し、他方は Ve に開く。階段は L に付く。ペリー邸は切妻、ルート邸は陸屋根。

⑥⑩ロス邸 (1915) : 暖炉が中心から外れて E を限定。[L-D]境界には飛長押し袖壁が突き出し、対面は Ve への開口。

⑥⑪バーク邸 (1915) : ⑤⑧の鏡像の平面において暖炉の方向を 90 度回転させた構成。L と D にまたがる造付けテーブルが DA を構成。2 階への階段途中に Te。2 階は Ba を持つ 3 B と Sv によって十字形平面を志向。アプローチに広い GC。

⑥⑫ボック邸 (1916) : ④⑩を基本平面構成とする長方形平面。LD 間に段差。LD 間のアルコーブと Pa の一部が突出し、背後に使用人動線と P/Sv が付く。E と H は炉辺の造付椅子によって L から区分。暖炉シャフトは L, D, MB で共有。

[表 8] 「自邸」型住宅の平面図とダイアグラム (7)

| | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 | ダイアグラム A | ダイアグラム B | 平面図 |
|---------------------|----------|----------|-----|----------|----------|-----|
| ③ コモ・オーチャード 1909 | | | | | | |
| ⑤ ジーグラー邸 1910 | | | | | | |
| ⑤ 「郊外住宅」案 1911 | | | | | | |
| ⑥ グリーン邸 1912 | | | | | | |
| ⑦ フロリダ・コーナージュ案 1912 | | | | | | |

3. 「自邸」型住宅の変容

冒頭で述べた通り、1900 年以前の住宅には、「自邸」型と「チャーリー」型しかない。後に出現する各型と「自邸」型との連関に着目しつつ、その変容を考察する。

3-1) 「チャーリー」型との差異

1900 年以前の「自邸」型 21 件中、使用人専用階段を持つものは 5 件あり、そのうち実現したものは 2 件しかないのに対して、「チャーリー」型の 11 件中 9 件は使用人専用階段を有している¹¹⁾。1900 年以前において、「チャーリー」型は比較的規模の大きな住宅に採用され、それに対して「自邸」型はコンパクトな住宅に採用されていると言えよう。全体的に見ても、「自邸」型で使用人専用階段を持つものは 60 件中 9 件 (15%) であるのに対して、「チャーリー」型では 39 件中 21 件 (54%) である。「自邸」型には主動線と使用人動線が途中合流する階段を持つものが 8 件ある¹²⁾ が、この工夫も建築の面積的制約に起因すると考えられる。建築面積の制約の背後には敷地の制約がある。初期の「自邸」型住宅の

敷地は細長い分譲地にあるものが多い。L, D, Reに見られるベイウィンドウやアルコーヴ, Teや庇の突出は, サーヴィス緒室であるKやPaには見られない。これらの突出は, 決して広くはない敷地の中のコンパクトな矩形平面でありながら, 外へ向かって拡張しようとする空間の意志の現れと解される。殆どの住宅の中心には暖炉が据えられる。暖炉を中心に周囲へ拡張していこうとする空間の意志は, やがて「ウィリッツ」型や「ヒコックス」型の十字形平面やT字形平面として実現されることになる。

3-2) 「ウィリッツ」型へ

⑨マカフィー邸第1案(1894)から⑩同第2案(1894)への変容, 及び⑫グッドリッチ邸(1896)から⑬ロバーツ邸案No.1(1896)への変容は, 「自邸」型から「ウィリッツ」型への変容の契機と見ることができる。前者においては, Kの地階への移動と暖炉の移動によってLの両側への開けが実現するとともに, DemをDが取り込むことによって, 暖炉を軸としたLとDの対角線方向の連続性, すなわち<L-D>の萌芽が見られる。しかし, Dの中心軸上に新設された暖炉はLの中心軸上に移動した暖炉と未だ一体化されておらず, 2室は未だ[L-D]の繋がりに留まっている。後者においては, ⑫でL(Sit)には衝立で仕切られたLibがあり, 実質的には[L-Lib-D]となっているが, ⑬において暖炉のイングルヌックのベンチが移動し, 扉によってLからDへの行き来が可能となる。⑬では, 扉なく繋がっているのは[L-Lib-D]であり, [L-D]は扉によっていわば副次的に繋がるに留まっているが, ①ライト自邸(1889), ②ブラッサム邸(1892), ⑥P.ゴーン邸(1894), ⑦F.バグリー邸(1894)まであったL(Sit)の暖炉イングルヌックD側の側壁は, ⑩R.ファーベック邸(1897)を最後に, 以降「自邸」型には見られないから, ⑬における[L-D]間の扉の出現は, LとDのダイアゴナルな繋がりの直前の現象と捉えることができる。これらを契機として, 「ウィリッツ」型は, ウォリス・コテージ(1900), ダヴェンポート邸(1901), 「大空間のある小住宅」案(1901)を経て, ウィリッツ邸(1902)で成立する¹³⁾。

3-2) 「ヒコックス」型, 「ロビー」型, 「デイビッドソン」型との繋がり

ウィリッツ邸以降, 「自邸」型においてLとD両室の外壁面がずれる形で対角線方向に配されるもののうち, ⑳ロバーツ4棟集住計画(1903), ㉓ビーチ邸(1906), ㉗グリッドレー邸(1906), ㉔ポイントン邸(1907), ㉙ラーウィル夫人邸案(1909)は「ウィリッツ」型の亜種と見なせるが, いずれもLの暖炉背後でDとEHの繋がる点が共通する。

㉓サットン邸第2案(1905)は, 「ウィリッツ」型の第1案(1905)から「ヒコックス」型の実施案(1905)への途上の案である。㉗ギルモア邸(1908)は, Libが[L-D]と一体化していないが, 偏心した暖炉や異なる面積のL, D, Lib等の構成は, 「ヒコックス」型の後期であるH.アダムス

邸第1案(1912)に先行するものである¹⁴⁾。

㉓ビーチ邸では先述の通りLの暖炉背後でDとEHの繋がりが志向されているが, これを満たすその「初期案」は㉔ペイカー邸第1案(1907)に酷似する「ロビー」型である。㉙M.アダムズ邸の「実施案」(1905)を経て, ㉚トメク邸(1905)に至る¹⁵⁾。またペイカー邸の「実施案」は「デイビッドソン」型であり, ㉛メルソン邸案(1909)は「デイビッドソン」型への志向を強く持つ。<H-L-D>の「ウィリッツ」型から3者が互いに繋がる「自邸」型と「ロビー」型を介して, <L-H-D>の「デイビッドソン」型が成立すると見ることができよう。ここに, 繋がり①から繋がり②への移行の事態が認められる。

3-3) 繋がり③へ

「ウィリッツ」型成立以前の「自邸」型において, L, D, Reにベイウィンドウやアルコーヴ等の突出のないもの, あるいはLとDの外壁が一直線に揃うものは, ほとんどない。一方, ウィリッツ邸成立以降, 上述の突出がなく, LとD両室の外壁面が一直線に揃うものが多数見られるようになる。これらは, 「ウィリッツ」型や「ヒコックス」型に見られる十字形平面やT字形平面に対し, ほとんど矩形の平面となる。

矩形平面を志向する「自邸」型の模式図を[表9]に示す。㉑カリフォルニアの住宅案(1900)は正方形を意図した平面の初期例であるが, 背面するL, D両側に暖炉が開く。㉒ランプ邸(1903)はコンパクトな矩形平面¹⁶⁾であるが, Eを介さずLに直入。上階への階段はDからアクセスし, またDとKが繋がっていない。㉔5000ドルの耐火住宅案(1907)は, ①ライト自邸(1889)の基本平面構成をコンパクトに正方形平面にまとめた1つのプロトタイプと見なせる。㉕「郊外住宅」案(1911)において, DがLに連続するDAとなり, DAとLに跨るテーブルが出現し, 暖炉が平面中心からずれてLとDA側に向く。暖炉背面はDではなくE。㉖グリーン邸(1912)は暖炉の向きは㉕に準ずるが, 跨るテーブルはなく, DAとはならない。㉗ロス邸(1915)は㉕を矩形にまとめたものと解される。㉘パーク邸(1915)は㉕の実施と見なせるが, 暖炉はLのみに開く。

㉕㉖㉗㉘はいずれも宅地開発計画に位置づけられ, ㉕の敷地も分譲地が想定され, 鏡像平面やヴァリエーション構成が展開されている点からも, ライトがこれらの住宅において

[表9] 矩形平面「自邸」型の変容(模式図)

| | | | |
|------------------|------------|-------------------|-------------------|
| ㉑カリフォルニア住宅案 1900 | ㉒ランプ邸 1903 | ㉔5000ドルの耐火住宅 1907 | ㉓㉔㉕ ㉖㉗㉘ ㉙㉚㉛ |
| | | | |
| ㉕「郊外住宅」案 1911 | ㉗ロス邸 1915 | ㉘パーク邸 1915 | |
| | | | |

ある程度の多様性を念頭においた量産化を志向していることは明らかである。この志向は、「アメリカン・システム・ビルド・ハウス」(1915)に続くが、⑤⑦⑧に見られる DA や [L-DA] に跨るテーブルは、繋がり③:「EH-LD (食堂を含む居間)」の構成をとる第 2 黄金時代のユーソニアン・ハウスに繋がる特徴として注目される。

結。「自邸」型住宅の変容の意味

「自邸」型は、「チャーリー」型に比して狭小な敷地において採用されていたが、矩形平面からの主室の突出等に、そこからの空間の伸び広がり志向されており、暖炉を中心として外へ向かって展開する「ウィリッツ」型への萌芽が認められた。「ウィリッツ」型の成立後には、そこにおける H-L-D の繋がり H-D の繋がりが増えられ、3 者が互いに繋がる「自邸」型を経て「ロビー」型が成立する。さらにそこから L-D の繋がり切れて L-H-D の「デイビッドソン」型が成立することで、繋がり①と繋がり②とが結び付けられた。このような空間の拡張的な展開と同時に、「自邸」型は、よりコンパクトな構成としての矩形平面も志向した。平面の中央で L と D を分けつつ繋げていた暖炉が L のものとなると同時に D が DA となって L の一部となり、繋がり③への萌芽が認められた。「自邸」型はこのように、空間の拡張志向において、プレイリー・ハウスの典型と見なされる他の型へ展開する可能性を有するだけでなく、単純化志向において、晩年のユーソニアン・ハウスへの萌芽も覆蔽していることが明らかにされた。「ウィリッツ」型や「ヒコックス」型がそうであったように、ここでも、計画案(②)カリフォルニアの住宅案、④ 5000 ドルの耐火住宅、⑤「郊外住宅」案、⑦フロリダ・コテージ案)が重要な役割を果たしていた。

謝辞

本研究は科学研究費補助金 26420658 の助成による成果の一部である。記して謝意を表する。

出典

[CWo1] Pheiffer, B. B., "Frank Lloyd Wright, 1885-1916, The Complete Works," TASCHEN, 2011 / [Mg1] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1887-1901," A.D.A.Edita, Tokyo, 1986 / [Mg2] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1902-1906," A.D.A.Edita, Tokyo, 1987 / [Mg3] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1907-1913," A.D.A.Edita, Tokyo, 1987 / [Mg4] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1914-1923," A.D.A.Edita, Tokyo, 1985 / [Com] Storrer, W. A., "The Frank Lloyd Wright Companion," The University of Chicago Press, 1993, 岸田省吾監訳『フランク・ロイド・ライト全作品』丸善, 2000

注記

1) 先行論文として拙稿①「プレイリー・ハウスの生成システム フランク・ロイド・ライトの思索と制作」日本建築学会計画系論文集, 第 700 号, pp. 1449 ~ 1457, 日本建築学会, 2014.6, 拙稿②「ヒコックス」型住宅の変容について F. L. ライトの住宅作品における多様性生成システムの研究」日本建築学会計画系論文集, 第 746 号, pp. 775 ~ 781, 日本建築学会, 2018.4, 及び拙稿③「チャーリー」型住宅の変容について F. L. ライトの住宅作品にお

る多様性生成システムの研究」兵庫県立大学環境人間学部研究報告第 21 号, pp.140-160, 2019.3, 参照。

- 2) ダイアグラム A における要素(部屋)限定の拠り所を限定度の強い順に示せば、①壁・窓・ドア>②袖壁・垂壁>③段差・天井高となる。①なら必ず区別。②③による要素区分の判断は、関連する他の住宅との差異と同一性すなわち「型」の観点からそれ自体が変容の議論の対象となる。
- 3) ダイアグラム B の繋がり表記は、出入り可能であれば直線で繋ぎ、階段による上下の繋がり点線を示す。
- 4) 本研究独自のダイアグラムには、他に、居間と住宅と土地とのゲシュタルトを示すダイアグラム C があるが、本稿の考察では使用しない。
- 5) 前掲拙稿①参照。
- 6) 本稿における室名の略記は以下の通り。Alc: alcove: アルコーヴ / B: bedroom: 寝室 / Ba: balcony: バルコニー / Bre: breakfast room: 朝食室 / CB: child bed: 子供用寝室 / Co: corridor: 廊下 / Con: conservatory: サンルーム / D: dining room: 食堂 / DA: dining alcove: 食事アルコーヴ / Dem: demitasse: 小アルコーヴ / Dra: drawing room: 客間 / E: entrance: 入口 / EH: entrance hall: 入口ホール / ESH: entrance stair hall: 入口階段ホール / f: fireplace: 暖炉 / GB: guest bedroom: 客用寝室 / GC: garden court: 庭 / H: hall: ホール / He: heater room: 加熱室 / K: kitchen: 台所 / L: living room: 居間 / La: laundry: 洗濯室 / Lib: library: 書斎 / Lo: loggia: ロジヤ / MB: master bedroom 主寝室 / Nu: nursery: 子供室 / Of: office: 事務所 / Pa: pantry: 配膳室 / Par: parlor: パーラー / Pas: passage: 廊下 / Po: porch: ポーチ / RE: rear entry: 勝手口 / Re: reception: 応接室 / RV: rear vestibule: 勝手口 / Sit: sitting room: 居間 / SH: stair hall: 階段室 / SPo: sleeping porch: 就寝ポーチ / Stu: studio: スタジオ / Sv: servant: 使用人室 / Te: terrace: テラス / U: utility: 家事室 / V: vestibule: 玄関 / Ve: veranda: ベランダ / Ya: yard: 庭
- 7) 前掲拙稿①及び③参照。
- 8) 本稿における作品年代は [CWo1] に準ずる。
- 9) O. ゴーン邸の資料は非常に少なく、管見では、アーカイヴズにある立面 (FLW Archives (9406.001)) と、Architectural Record, vol.7, 1900.7 掲載のペース及び簡略的 1 階平面図のみである。復元された 1 階平面図は P. Kruty, P. E. Sprague, "Prelude to the Prairie Style, eight models of unbuilt houses by Frank Lloyd Wright 1893-1901," University of Illinois, 2005 参照。
- 10) ロバーツ邸案 No.1 ~ 5 (1896) の内の「No.2」に酷似。「No.2」は屋外エントランス・テラス及び屋根のデザインを⑬と異にしつつ、屋内平面はほとんど⑬と同じ。1 階平面図には、暖炉イングルスックに D への扉を遮るような椅子と、[L-Lib] 間の間仕切り壁部分に打ち消しを意図するような波線という、2 つの書き込みが見られる。
- 11) 使用人専用階段を持つ「チャーリー」型 9 件 (番号は前掲拙稿③のもの): ①チャーリー邸 (1891), ③ハーラン邸 (1892), ④クラーク邸 (1892), ⑤ウィリアムズ邸 (1895), ⑥ムーア邸 (1895), ⑦ヘラー邸 (1896), ⑨ハッサー邸 (1899), ⑩ヒルズ邸 (1900), ⑪ジョーンズ邸 (1900)。同「自邸」型 5 件: ⑨マカフィー邸第 1 案 (1894), ⑩マカフィー邸第 2 案 (1894), ⑪ J. ボールドウィン邸案 (1895), ⑬ G. ファーベック邸 (1897), ⑭ブラッドリー邸 (1900)。
- 12) 主動線と使用人動線が途中合流する階段を持つ「自邸」型 8 件: ②ブラッサム邸 (1892), ④ W. ゲイル邸 (1893), ⑥ P. ゴーン邸 (1894), ⑦ F. バグリー邸 (1894), ⑧グッドリッチ邸 (1896), ⑩ R. ファーベック邸 (1897), ⑫フリック邸 (1901), ⑬ギルモア邸 (1908)。同「チャーリー」型 2 件 (番号は前掲拙稿③のもの): ②マッカーサー邸 (1892), ③フリック邸 (1901)。
- 13) 雑誌 Ladies Home Journal に掲載された「大空間のある小住宅」案 (1901) は、その外観は⑭ブラッドリー邸 (1900) 及びダヴェンポート邸 (1900) に、プランはウィリッツ邸 (1902) に酷似する。拙稿「ウィリッツ」型平面の住宅について フランク・ロイド・ライトの住宅作品における生成論的研究 6」, 日本建築学会中国支部研究報告集第 34 巻, 2011, No936 参照。
- 14) 前掲拙稿②参照。
- 15) ライトは「トメク邸の平面は後にロビー邸において完成した」[Com128] と述べている。拙稿「ロビー」型平面の住宅について フランク・ロイド・ライトの住宅作品における生成論的研究 8」, 日本建築学会中国支部研究報告集, 第 35 巻, 2012, No937 参照。
- 16) ランプ邸では日常生活における松葉杖利用が想定された。[Mg2-92] 参照。

(令和元年12月3日受付)